No.75
Jan. 17th, 2023

NEWSLETTER
国際音楽資料情報協会日本支部

ISSN 2432-6135
(online)

International Association of Music Libraries, Archives and Documentation Centres Japanese Branch

【特集】プラハ大会参加報告

【目次】

○プラハ大会参加報告：
・IAML プラハ大会に出席して（荒川恒子）p.1
・IAML 2022 Prague に参加して（那須聡子） p.5

○事務局だより p.8

IAML プラハ大会に出席して

荒川恒子

【1.鉄のカーテンの向こう側】

私にとってチェコは非常に思い入れの強い国である。1968 年 8 月 20 日夜、「人間の顔をした社会主義」を求めるチェコスロバキアの動きに、ソ連邦や東欧の社会主義国が警戒心を起こし、軍事介入により抑圧する事件が起こった。それに対しプラハ市民達は、通りの名前の記されたプレートを剥がし、土地勘の無い彼らの目を晦まし防戦に努めた。ライン川畔の小都市ボッパルトの語学研修所、ゲーテ・インスティチュートの教室でこのニュースを聞いた。丁度同級生にチェコ出身の青年がいたため、緊張が走った。私の外国生活の始まりであった。

当時政府奨学生としてドイツで学んだ学生に義務付けられていたことは、留学期間中に東ベルリンを訪れることであった。東西ベルリンは地下鉄で行き来ができたが、東西の相違を肌で感じた時の不安感は忘れがたい。さらに二度と外国を訪ねることはないと思い、「学生旅行　アスタ・ライゼ」のアレンジでプラハに行き、鉄のカーテンの向こう側の生活振りを覗いたことも懐かしい。私の予想に反して、当地の住民達はかなり西側の情報を持っていた。また当時の旅行案内には、路上で自国通貨をマルクに交換したがる人々が近寄ってきたら、素早く察知して交換する旨が書かれていた。このおおっぴらな行動は、見て見ぬ振

会場となったプラハ中央図書館(正面)と
チェコ国立図書館（左手前）

りをすることが、プラハでは許されていた証拠と思われる。そのような水面下での様々な動きが、一気に表面に出てきたのが 1989 年 11 月 9 日ベルリンの壁の崩壊である。それに続き共産圏の国々は、続々と国境を開け始めた。チェコも遅れまいと続いたが、その動きは緩慢なもので一般に「ビロード革命」と称される。

【2.コロナ禍のヨーロッパ】

コロナの世界的な蔓延の煽りを受け、筆者にとってもすこぶる久しぶりの海外旅行であった。国境を接するヨーロッパの国々の旅行の準備には、不安が付きまとう。訪問予定の国々の事情を調べても、正解がよく分からないままの旅行だったからである。まずドイツに入りチェコへの入国の準備をした。それがコロナ禍の特別な事情なのか判明しないが、ドイツを横断しケルンからチェコを目指すのは大変であった。行きはレーゲンスブルクで国境を越え北上するルート、帰りはプラハからドレスデンを通るルートを選んだ。以前から悪名高いドイツ鉄道であるが、最近の評判はすこぶる悪い。何も理由を明かされないままに、大きく乱れる運行ダイヤを甘受させられるのである。案の上往復共に大きな乱れを伴い、ようやくの到着であった。特に帰路のドレスデンでは予約していた列車のキャンセルにあ

い、さらに北上してベルリンを経由して西に向かうことにした。お陰でドイツ連邦共和国の内側を、国の形をそのまま描いたように丸く走る汽車旅となった。その間チェコからドイツに向かう国境近くで、入国に際しマスクを付けるようアナウンスがあり、皆が当然のように従う姿に、国境を接する国々のコロナ対策の方法を見る想いがした。

さてコロナ禍の生活を援助するように、ドイツでは 9 ユーロ払えば鈍行列車で国中を移動できるチケット、チェコでは 65 才以上の者に地下鉄やバスの無料パスが出されていた。このような政府の方針のおこぼれをいただき、ありがたいやら申し訳ないような思いがした。どこの国でもコロナ禍への対処をしながら、それにも拘わらず節度をもった行動が求められる、あるいは命じられていることを体験した。帰宅してすぐに、大会本部から会期中にクラスターが起こったこと、念のため PCR 検査を受けることを勧めるメールが届いた。何事も落ち着いて処理していた、当地の図書館員達の冷静沈着な対応振りへ、ねぎらいの気持ちは膨らんだ。

【3.本大会のメイン・テーマ】

さて大会のオープニング・セッションに選ばれたテーマは、「ビロード革命 30 年後の”The Big Four”」である。ビッグな 4 人とは、ベドルジハ・スメタナ（1824-1884）、アントニン・ドヴォルザーク（1841-1904）、レオシュ・ヤナーチェク（1854-1928）、ボフスラフ・マルティヌー（1890-1959）と、各々一世代ほど異なるボヘミアの生んだ音楽家のことである。彼らの名を冠した博物館、研究所、出版プロジェクト、作品等に関する概観である。スメタナ博物館、ドヴォルザーク博物館、ヤナーチェク財団およびアーカイヴ、マルティヌー研究所およびセンター、ブルノのモラヴィア博物館、そしてベーレンタイター・プラハから、各組織の来歴に関する説明があった。わずかの年月の相違は、博物館や研究所の設立事情、楽譜や遺品の管理体制等にも変化をもたらす。そしてビロード革命は出版業界の動きにも、確実に影響を与えたことが示された。

25 日のオープニング・セッションおよび 27 日 9:00-10:30 での発表「ボヘミアの音楽目録、主題カタログの過去と現在」で発表されたことを、総括して御紹介しておこう。

現在のチェコの周辺に人々が住み始めた古代から、ケルト人、ゲルマン人、スラヴ人、フランク人、マジャル人等が入り乱れ、国の体制は絶え間なく変遷した。20 世紀だけをみても、チェコスロバキアとして共和制、ドイツ占領下、共産主義体制下を経験した。1989 年の「ビロード革命」後に社会主義国から脱皮。1993 年にチェコとスロバキアに分離し現状となっている。このように複雑な事情を反映し、音楽資料を取り巻く環境も二転三転している。

音楽活動は 1348 年にプラハに設立されたカレル大学、1556 年に建設されたイエズス会の教育総合施設クレメンティヌム、いずれにおいても非常に盛んであった。なおこの 2 つの施設は 1654 年に統合された。その後 1773 年にはイエズス会は撤退し、大学だけが当地に残った。質量ともに見事なクレメンティヌム・バロック図書館は、プラハが中世から学問の中心地であったことを彷彿とさせる。1777 年には大学図書館となり、1918 年には政府の管轄下に置かれた。1923 年に国立図書館・音楽部門が設立されている。その後の紆余曲折を経て、1990 年までには現在の国立図書館の体制となった。

クレメンティヌムでは、18 世紀初頭から音楽目録が作成されていた。しかも 18 世紀半ばにはインチピド付きのカタログも作成されている。また各地の廃院となった修道院等の資料も引き取った。上述のように古くから多様の文化が入り乱れている様は、これら 18 世紀から今日に至るまでに作成された、カタログ等を通して概観することができる。音楽資料は国立図書館の重要な部門を形成しているのである。

資料の整理に尽くした 20 世紀の重要人物は、ブルノのマサリク大学で教鞭を取った、書誌学者で音楽学者ジリ・フカク（1936-2002）である。彼は 2 巻からなる『チェコ音楽事典』（1963, 1965）の発行、音楽書誌学研究所の設立（1966）等を通して、チェコ音楽文化を牽引した。フカクの偉業と並んで、もうひとつ重要なことはユニオン・音楽カタログの作成である。この仕事は未完であるが、その後も様々なボヘミア音楽コレクションのカタログ作成、さらに RISM との提携に活かされている。

音楽と関わる品々の収集、展示の場として「国立チェコ博物館」がある。これも 5 つの部門に分かれるが、その内のひとつが「音楽部門」である。主として西洋の楽器が収

集されているが、スメタナやドヴァルザークの生涯や作品に関わる資料も移管されている。なおヤナーチェクやマルティヌーの資料は、目下「チェコ音楽財団 Czech Music Fund」管理下にある。

20 世紀前半の共和制、後半の共産主義から脱皮し、「チェコ共和国」となった現在、過去の遺産はいまだ再編成、整理中である。しかし先人達の努力は結実し、マヌスクリプト(多くの自筆譜を含む)、印刷譜、作曲家や演奏家の手紙、チェコや他国の音楽書や雑誌は、閲覧され続けている。

本大会を総括してみると、ボヘミア地方に関わる音楽資料の報告、さらにオーストリア、ポーランド、バイエルン、ザクセン、プロイセン等、中央ヨーロッパの資料に関わる発表が目立つ。それらは単にこれらの国々に現存する資料ばかりでなく、これらの地方で活動する人々の交流にも着目させることとなった。いくつか論題を列挙しておこう。

7 月 25 日(月)

・チェコとクロアチアにおける、サウンド・アーカイヴの現状、問題解決のための協力体制について

7 月 26 日(火)

・19 世紀のボヘミアの作曲家ーヴァーツラフ・ジンドジフ・ファイト(1806-1864)、フランツ・マルシュナー(1855-1932)について
・ポスター・セッションとして
① スロバキアの音楽ヴィデオ紹介
② モラヴィア図書館にあるアントニン・ネミク・コレクション
③ プラハにあるフランツ・ベンダの 3 つのコレクション
④ 音楽学者ヤン・シュタッドラー (1922-2019) 図書館紹介
⑤ スロバキアの都市バンスカー・ビストリツァの文学・音楽博物館設立 50 周年
⑥ スメタナの《わが祖国》新校訂版
⑦ 合唱関係に特化した図書館「国立文化情報・コンサルタントセンターNIPOS」
⑧ ドヴォルザークの歌曲編纂の試み
⑨ マルティヌーの劇場作品の脚本出版

7 月 27 日(水)

・ボヘミアの音楽目録、主題カタログの過去と現在―1700 年に遡るボヘミア地方の目録、チェコスロバキア、チェコの歴史的カタログ、18 世紀中頃に作成されたボヘミアの作曲家達のカタログ、カタログ作成の歴史的展望、現状、将来への課題等々

7 月 28 日(木)

・音楽書等に見られる隣国との交流
① ヤスナ・グラ修道院の資料から読み取るポーランドとチェコの交流
② セルビアのチュプリアの学校図書館に残された作曲家 D.コリク（1907-1987）の資料
・中央ヨーロッパの音楽コレクション
① 国立博物館―チェコ音楽博物館におけるボヘミア音楽の中世から現代まで
② 国立図書館音楽部門所蔵のコレクション(19, 20 世紀のボヘミア音楽)。主としてヴィーチェスラブ・ノヴァーク（1870-1949）の資料について

7 月 29 日(金)

・20 世紀初頭のチェコ・ポーランド音楽と音楽家
① 19 世紀末にアメリカに移住した宝石商エドュアルド・ジェドリカにより制作されたチェコの歌と詩のレーベル
② グダンスクの音楽アカデミーに残された、アコーディオン奏者イェジー・ユレク（1945-2011）の資料
③ 20 世紀初半分に活躍したオルガニスト　ベドリヒ・アントニン・ウィーダーマン（1883-1951）について

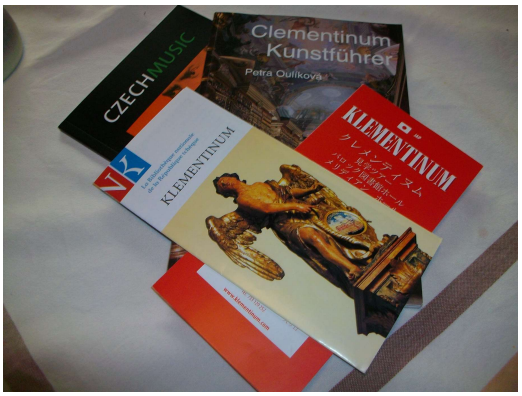
いずれも世界的な視点からみると、規模の小さな発表である。しかしそれらを総括し、さらにコンサート等の演奏曲目等も見渡すことにより、この国の健全な音楽の在り方が見えてくる。

【4.エピソード】

ホワイエに置かれていたベーレンライターのカタログから、同社がボヘミアの音楽家全般の出版に非常に力を入れていること、その中心は 20 世紀に国境を越えて重要な地位を獲得した 4 人であることが分かる。しかし彼らばかりでなく、ルネサンス時代の様々な宗教的作品、今回田中伸明氏が発表されたフランツ・ベンダ(1709-1786)、また会場のひとつともなったクレメンティヌムで学んだヤン・ディスマス・ゼレンカ(1679-1745) 等バロック時代の音楽家達、古典・ロマン派の作曲家、現代曲まで、押しなべて平等に取り上げられているのである。このカタログから、ボヘミアではいつの時代にも音楽が盛んで、享受されてきた姿が浮き彫りとなる。

事実当地のコンサート・プログラムの内容は、非常に印象深い。本会議のためには 3 本のコンサートが準備されていた。いずれも国内外で活躍するグループが、編成を小さくして奉仕した。7 月 25 日には国立博物館のホールで、女性合唱団 Cancioneta Praga が 4 大巨匠、さらに世界の名歌とでも称されようレパートリーを、可愛くも楽しく演奏した。翌日 26 日にはクレメンティヌムのミラー・チャペルで、Epoque Quartet によるコンサートである。このアンサンブルは、いわゆる古典もうまいが、ジャズ、ロック、パンクとレパートリーを広げ、世界を股にかけての活躍を示す。最後は 28 日クレメンティヌムの聖サルヴァトール教会で開催された Capella Regia Praha による「バロック時代のプラハの音楽」である。ゲオルク・ムファト（1653-1704)、アントン・ライヒェナウアー（1730 没)、ヨハン・カスパール・フェルディナンド・フィッシャー（1656-1746)、アントニオ・ヴィヴァルディ (1678-1741)、グンター・ヤーコプ（1685-1734)、ヨーゼフ・ブレンナー（1689-1742）と並ぶ。どのコンサートも気持ちの良いサウンドを獲得できる空間で聴ける至福の時間であった。ただ私にとって残念であったのは、チェコの誇るべきゼレンカの作品が演奏されなかったことである。

筆者の IAML 参加は、水曜日の午後に参加した国立博物館―チェコ音楽博物館訪問も含めると、ある種の纏まりをもった感がある。この博物館には 17-19 世紀のチェコで用いられた、鍵盤楽器や弦楽器が中心に収められている。



クレメンティヌムに関するパンフレットと
ベーレンライターのカタログ

デモンストレーションをした鍵盤楽器奏者は、古楽器の扱いには慣れていないが、そのことを自身がよく分かっておられた。その他の奏者は非常に上手であり、チェコの音楽レヴェルの高さ、また本会議のために準備が周到にされたことを、伺わせる楽しい一時となった。

大会はアール・ヌーヴォ建築による見事な市民会館、スメタナ・ホールでのフェアウェル・パーティーで締めとなった。チェコはおしなべて食事が美味しい。会議中休憩時間に並べられたビュッフェしかり。暑い日々の喉を潤す冷たい飲み物も、軽食も、贅沢というより気持ちの良い品々である。最後のパーティーにはバンドが入り、少し時代遅れのようなキャバレー音楽が流れた。

おっとりとしたプラハを懐かしく思い起こす日々である。「百聞は一見に如かず」。いにしえから現代の音楽までの情報を、バランスよく発信しているチェコの音楽状況に、ある種の健全な社会を見る想いであった。

（山梨大学名誉教授）

IAML 2022 Prague に参加して

那須聡子

【1.はじめに】

今年の IAML 国際大会は、チェコ国立図書館（写真 1）とプラハ中央図書館において、2022 年 7 月 24 日から 29 日の 6 日間にわたって開催された。本大会では、活動報告、研究発表、ポスター発表、委員会等の会合、総会、展示、演奏会、遠足などが行われたほか、「音楽学のためのデジタル図書館に関する第 9 回会議 9th International Conference on Digital Libraries for Musicology (DLfM)」も同時に開催され、プログラムにはそのためのセッションが組み込まれた。この大会で報告者は下記の研究発表を行った。

写真 1：チェコ国立図書館

【2.発表について】

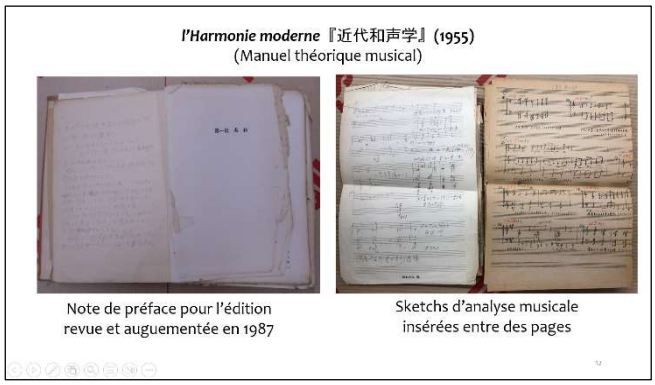
報告者の発表を含むセッションは、大会 2 日目、25 日（月）にプラハ国立図書館内のミラー教会 Zrcadlová kaple で行われた。セッション名は「作曲家と音楽家のアーカイブズ：アクセスと保存の課題 Archives of composers and musicians: access and preservation challenges」で、大英図書館音楽コレクション主任であったリチャード・チェッサー Richard Chesser 氏（2022 年 9 月退職）が司会を務めた。当セッションの発表者は当初 3 名の予定であったが、うち 1 名が事情によりキャンセルしたため、当日はトーマス・シュヴァーク Toomas Schvak 氏（アルヴォ・ペルト・センター、エストニア）と報告者の 2 名が発表した。

報告者の発表は、作曲家・松平頼則（1907–2001）の自宅に残されていた資料群（以下、松平資料群）を事例とし、「松平頼則の資料群：地域史博物館の役割の中に音楽家個人の資料群をどのように位置づけるのか？　Le Fonds Yoritsuné Matsudaïra : Comment introduire les archives personnelles d'un musicien au sein d'un musée historique régional?」というタイトルで行った（資料 1）。

資料 1：発表スライド、タイトルページ

松平が府中松平藩（現在の茨城県石岡市域）の旧藩主の家の出身であるという理由から、松平資料群は現在茨城県立歴史館（以下、歴史館）の一時預かりの状態にある。そのため、今後これが同館で活用されるためには、歴史館の活動方針の中に当資料群を適切に位置づけることが求められる。松平資料群を構成する資料は、ピアノ演奏、作曲、音楽理論研究、著述・執筆、教育・指導、文化的団体への参与といった松平の音楽家としての活動に密接にかかわっているものが大部分であるが、この他に、府中松平家の文化的関心を窺わせる資料も含まれている。歴史館というとりわけ地域の歴史に関連する資料保有施設において当資料群の在り方を検討するのは、このような松平資料群の成り立ちと特徴があるからである。発表では、茨城県内と歴史館に保管されている府中松平家に関する他の歴史資料にも触れ、歴史館の活動方針に即して松平資料群を位置付ける可能性とその課題に言及した。

松平資料群に含まれる資料は、松平が行った音楽活動に関する資料がほとんどであるが（資料 2）、これらの資料は松平の活動ばかりでなく、当時の音楽界の状況を知る手掛かりとなることが期待できる（資料 3）。さらに、府中松平家に関する資料は、茨城県が既に保管する地域の歴史資料と併せて検討されることで、明治後期から大正期にかけての旧華族の文化的な側面を示す貴重な資料となりうる（資

料４、５)。このように松平資料群には、松平の活動領域と関連する音楽文化史の資料という側面と、地域文化史の資料という側面があるが、松平の音楽活動を彼の人となりも併せて理解しようとすると、これら２種類の資料の特徴は必ずしも明確に区分できるものではない。さらにこの資料が残されてきた状況と資料群作成者である松平頼則の活動領域から考えると、ある一つの資料が複数の活動と関連している場合も認められる。資料が実際に残されている状態は、そのような資料群作成者の活動の背景や足取り、資料同士の関連を示す情報でありうるため、のちの時代においても辿ることができるように、「資料のまとまり」としての特徴を記録することも大切だと考えている。

資料２：松平の著書に関連する資料

資料３：国際的な場面での松平の活動

資料４：府中松平家の文化的活動を窺わせる資料

資料５：松平資料群に含まれる府中松平家の資料

他方、資料群を利用に供し、活用して貰うにはどうしたらよいのだろうか。一般的には、資料の目録が資料と利用者を繋ぐ役割を担っているとされている。しかしそれだけではなく、資料整理後に展示や関連図書などの出版、演奏会、講演会などさまざまなイベントを通して、その資料群の多面的な可能性を提示し、より広く資料群の利用と活用を促進する試みも重要であろう。資料群の整理後に資料が埋もれることなく役立てられ、その価値が認められれば、資料保有施設の活動への理解が深まることも期待できる。とはいえ、資料群の利活用にあたっては、資料に関わるさまざまな権限に留意し、さらには、松平資料群と関連する資料やそれを保管する他の施設とも連携しながら、可能性を柔軟に検討していく必要がある。

本セッションの聴取者は 20 名ほどであったが、発表後の質疑応答で、スライドで取り上げた作曲家グループの写真に関して追加で説明を求められた。また、松平の楽曲を収録した音源の有無とその入手方法について質問を受けた。最後に司会者から、「背景をも含めて資料群を保管しようとするいい事例となるだろう」という講評をいただいた。報告者にとっては初めての海外発表の場であったが、日本における音楽家の資料群とそれを保管して行くことの課題について、国際的な場で関心を持って貰えたことは貴重な経験だった。

【3.その他の発表】

本大会では、報告者の関心に近い、音楽家が残した資料群を事例とした発表をいくつか聞いた。その中でも、エストニアの作曲家アルヴォ・ペルト Arvo Pärt (1935–) の資料に関する取り組みが興味深かったので少し触れておきた

い。当資料群とそれを保管するアルヴォ・ペルト・センターの活動は既に Fontes Artis Musicae, 44/2 (2017) で紹介されているが、本大会では、ペルトの私的な蔵書 (T. シュヴァーク氏、25 日) とアーカイブズ (A. キヴィシフ Anneli Kivisiv 氏、26 日) に焦点を当てて、この資料群をより広く利用に供するための取り組みが紹介された (写真 2)。これらの資料はペルトの活動と密接に関連し、彼自身にとって重要であるだけではなく、彼の活動を研究し、よりよく理解したい人たちにとっても貴重な情報源となる。

写真 2：発表を行うキヴィシフ氏

しかしながら、資料群作成者が存命中であるために、ペルトの活動に応じて資料群の全体やそこに含まれる資料同士の関係性は日々変化する。また、これらの資料を現在よりもさらに広く利用に供するためには、ペルトの資料群に含まれる個人的な情報および彼の家族に関連する資料に配慮しながら利用のための便宜を図る必要があることが指摘された。本発表では、それに関する課題をどのように克服するのかについて詳述はされなかったが、今後の展開を追うことで、時代が新しい音楽家の資料を保管し、広く利用に供するためのルールの構築と、そのような資料群に特有の諸課題に対応するファインディング・エイドの検討の良い事例となると思われた。当センターは 2010 年に開館したが、その取り組みから、既存の理論による資料の扱い方や活動の方法に倣うばかりではなく、その時代の利用者や資料の利用の傾向を踏まえながら新しい課題を段階的に検討し、より良い方法を模索していく必要性を改めて感じた。

また 29 日には、イアニス・クセナキス Iannis Xenakis (1922-2001) の生誕 100 年を記念する大規模で領域横断的なイベント「メタ・クセナキス」の一環として、クセナキス自身が 1979 年の創設に関わった現代音楽研究センター Contemporary Music Research Centre (略称 KSYME、

2018 年アテネ・コンセルバトワール内へ移築) と、イアニス・クセナキス・センター Centre Iannis Xenakis (略称 CIX、フランス・ルーアン) が共同発表を行った。当発表では、資料のデジタル化や多言語化、ヴァーチャルな空間での展示などを通して、研究者や音楽家からより広範囲の人々へと利用者の幅を広げる試みが紹介された。

【4.おわりに】

本大会は、2019 年以来 3 年ぶりとなる対面形式での開催であった。その間、コロナによりオンラインで会合が開催されたりしたが、実際に対面開催の現場に赴いて、音楽はその時代や人とだけでなく、その土地とも密接に関わっていることを改めて実感することができた。作曲家の活動の記録を残し、今後に役立てるために、資料はどうあるべきなのか、今後も引き続き考えていきたい。

(明治学院大学大学院博士課程)

事務局だより

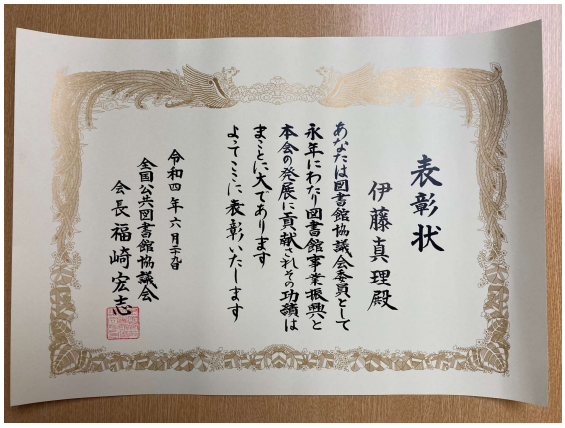
〇令和 4 年度 全国公共図書館協議会表彰

2022 年 9 月 6 日、当支部の伊藤真理支部長が「全国公共図書館協議会表彰」の表彰状授与を受けました。同表彰は、公共図書館の事業に尽力し、その功績顕著な図書館職員、図書館長、図書館協議会委員などを表彰するもので、今年度は 137 名が対象となっています。伊藤支部長の表彰は、長年にわたり愛知県図書館の図書館専門委員会委員として図書館事業の振興に貢献された功績が認められたものです。

※「令和 4 年度　全国公共図書館協議会表彰」の対象者一覧は以下 URL を参照。

https://www.library.metro.tokyo.lg.jp/uploads/news_101.pdf

平松哉人愛知県立図書館長から
表彰状を授与される伊藤真理支部長



授与された表彰状

〇第 23 回 図書館サポートフォーラム賞表彰

2022 年 8 月 26 日、図書館サポートフォーラムは今年度の「図書館サポートフォーラム賞」の表彰者 3 名を決定、うち 1 名に当支部の加藤信哉副支部長が選ばれ、11 月 2 日に表彰式が行われました。同賞は、ユニークで社会的に意義のある各種図書館活動を表彰し、図書館活動の社会的広報に寄与することを目的としたものです。

加藤副支部長への表彰は、全国各地の国立大学図書館に勤務していた間における、海外の先端的図書館システムの変革状況の国内への紹介や、国際教養大学特任教授・図書館長在任中の、同大学の特色に資する図書館経営の実現、紙とデジタルの両資料をシームレスに繋ぐハイブリッド・ライブラリーの構築などの先駆的功績が高く評価されたものです。今年度の同賞表彰者には、加藤副支部長のほか、小出いずみ氏(元(公財)渋沢栄一記念財団主幹)、松崎裕子氏（(株)アーカイブズ工房代表)が選ばれています。

https://www.nichigai.co.jp/lib_support/

※昨年度同賞を受けた鳥海恵司会員（(株）トッカータ)、林淑姫氏（近代洋楽史研究者）らの受賞挨拶は、以下 URL で閲覧可能となっています。

https://www.nichigai.co.jp/lib_support/pdf/forum17.pdf

表彰式での加藤副支部長（左から 2 人目）

〇2023 年の IAML 年次大会はケンブリッジで開催

2023 年 7 月 30 日～8 月 4 日にかけて、IAML の年次大会が行われます。今回の開催地は、英国・ケンブリッジです。みなさま奮ってご参加ください。開催の詳細等につい

ては、IAML 本部のウェブサイトのほか、以下をご参照ください。
・大会特設サイト：https://iaml2023.org/

〇IAML 日本支部第 72 回例会の開催

2023 年 1 月 28 日、IAML 日本支部第 72 回例会が開催されます。今回は音楽図書館協議会 2022 年度研修会を兼ね、音楽図書館協議会と共催します。どなたでも無料で参加できます。開催の概要は以下の通りです。

・日時：2023 年 1 月 28 日（土）14:00-16:00
（講演 90 分、質疑 30 分）
・開催方法：オンライン（Zoom）
・テーマ：『日本の音楽博物館の現状と将来について』
・講師：井上裕太氏（弘前学院大学文学部講師）
・内容：我が国では 2020 年現在で 90 館の音楽博物館があるといわれます。近年、来館者の減少や閉館を余儀なくされている事例がある一方で新たに音楽家博物館が開館しています。このような音楽博物館の現状と課題を分析します。次に、これに基づき、音楽博物館の将来について、特に、「博物館」「地域振興」「音楽」の連携の点から地域博物館の在り方について論じていただきます。
・定員：80 名
・参加費：無料
・申込：参加希望者は、2023 年 1 月 21 日（土）23:59 までに以下のフォームからお申し込みください。
https://forms.gle/8TMqi4Uhr8cYDYzM8

〇会費納入のお願い

会員の皆様のお手元には、既に 2022 年 11 月末に会費納入用の振込用紙を郵送いたしましたが、2023 年分の会費を未納の方は、至急お振込みのほどをお願いいたします。会費納入にあたり、ご不明の点などありましたら、以下の事務局メールアドレスまでご連絡ください。
・事務局メールアドレス：iamljp★j07.itscom.net
（文字列の★をアットマークに変えてください）

〇伝統芸能データベース「Global Jukebox」の公開

2022 年 11 月 10 日、慶應義塾大学が伝統芸能データベース「Global Jukebox」の公開を発表しました。同データベースでは約 1000 の民族から収集された 5000 件以上の楽曲の音声記録等のデータが利用可能です。記録された楽曲のデータの多くは民族音楽研究者アラン・ロマックスによって収集されたものだとのことです。
・「Global Jukebox」サイト：https://theglobaljukebox.org/
・慶應義塾によるプレスリリース：
https://www.keio.ac.jp/ja/press-releases/2022/11/10/28-133344/

〇「国立国会図書館デジタルコレクション」リニューアル

2022 年 12 月 21 日、国立国会図書館が「国立国会図書館デジタルコレクション」をリニューアルしました。

このリニューアルにより、全文検索可能なデジタル化資料が 5 万点から 247 万点に増加したほか、閲覧画面の改善や、画像検索機能の追加などが行われました。
・国立国会図書館によるプレスリリース：
https://www.ndl.go.jp/jp/news/fy2022/221202_01.html

〇株式会社トッカータによる広告出稿

団体会員の株式会社トッカータより、鳥海恵司会員の著作『議会図書館　人口統計グループ用語』と『議会図書館音楽演奏手段シソーラス』が新たに刊行されました。

トッカータ様からのお申し出により、これら新刊 2 点を含む同社出版物の広告を、前号に引き続き本号の最終頁にもご出稿頂きました。購入に係る詳細は広告をご参照ください。

Newsletter - 国際音楽資料情報協会日本支部
第 75 号
（2023 年 1 月 17 日発行）

国際音楽資料情報協会（IAML）日本支部
〒480-1197　愛知県長久手市片平 2-9
愛知淑徳大学人間情報学部伊藤真理研究室内
（担当：工藤）
https://www.iaml.jp

「音楽資源の発見の可能性を高める為に」

学術・学問を活かす社会を目指しています

SINCE 1999

出版物のご案内

日本目録規則 2018 年版

体現形(書誌)データ 完全実例集

音楽とその周辺

Complete Examples (Manifestation / Bibliographic)
Music and related fields

価格 ￥3,500（税抜）

日本目録規則 2018 年版

典拠データ 完全実例集

音楽とその周辺

Complete Examples (Authority)
Music and related fields

価格 ￥5,000（税抜）

議会図書館

人口統計グループ用語

Library of Congress
Demographic Group Terms
(LCDGT)

価格 ￥5,000（税抜）

議会図書館

音楽演奏手段シソーラス

Library of Congress
Medium of Performance Thesaurus for Music
(LCMPT)

価格 ￥4,000（税抜）

【編集著作】 鳥海 恵司
【発 行 者】 田島 克実
【発 行 所】 株式会社トッカータ ※各送料別途 ¥520

＜上記出版物の *Toccata MARC*（RDA適用：書誌・典拠データ）無償提供いたします＞

(NACSIS-CATP対応 想定データ 追加可能)

音楽資料用 目録システム・メタデータの専門企業

株式会社トッカータ

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場3−37−1 アルトビル4F

［お問合せ / お申込み：図書館情報部］

E-Mail：toccatamarc-info@toccatamarc.com

TEL / FAX：03-3363-1688 / 1690